

か年計画のサイエンスプランについての現況を紹介して頂いた。具体的なテーマについてはまだこれからであり、本連絡会における意見や提案は十分採用され得るとのことである。実施出来そうな観測内容としては、越冬隊では5年の間に1～2回大きな観測が可能との説明であった。また、現地観測だけにこだわらず日本でも並行して衛星・客観解析データやモデルを利用して研究が進められるようなテーマも考えられるとのことである。

これに対し参加者からはドップラーレーダーを持っていく、航空機を利用した観測はできないか、潜水艦で氷厚分布を測れないか、無人気象観測点の展開、などさまざまな意見が出た。また現在「しらせ」に限定されている南極への到達方法について、もっと自由に南極と行き来はできないものかとの意見も出た。これについては、航空機を利用して直接現地入りして観測する方法を確立することによって打破できる可能性があるが、現在の南極観測の実施方法を変えていくためには、素晴らしいテーマが是非とも必要である、とのことである。そのテーマについてであるが、今回具体

的な案は出なかったものの、南極にはまだまだ研究テーマが無数にあるとの意見も出て、今後じっくりとメイリングリストの coolnet などを利用しながらテーマを絞り込んで行く、ということになった。

### 3. その他

極域・寒冷域研究連絡会では、情報交換の場としてメイリングリストの coolnet を開設しております。興味のある方はどなたでも参加できます。参加方法などは「天気」の1997年8月号(p. 598)を参照して下さい。

### 謝辞

今回の連絡会の講演を快く引き受けて頂いた北海道大学低温科学研究所の藤吉康志氏、大島慶一郎氏に感謝申し上げます。また、今回の実施内容の打ち合わせに参加して頂いた国立極地研究所の和田誠氏、塩原匡貴氏、森本真司氏、橋田元氏に感謝申し上げます。なお、会場の準備をお願いした北海道大学地球環境科学研究科の山崎孝治氏にもあわせて感謝申し上げます。

## 日本気象学会および関連学会行事予定

行事名	開催年月日	主催団体等	場所	備考
国際シンポジウム 「東アジアのメソスケール 水循環と豪雨」	1998年2月2日 ～4日		名古屋大学シンポジ オン	名古屋大学大気水圏科学研 究所 坪木和久 Tel. 052-789-3493 Fax. 052-789-3436 E-mail: tsuboki@ihas. nagoya-u.ac.jp
中間圏界面領域の大気構造 と力学過程に関する国際シ ンポジウム	1998年3月16日 ～20日	京都大学超高層電波研究 センター	京都大学宇治構内 (宇治市五ヶ庄)	京都大学超高層電波研究セ ンター 津田敏隆 Tel. 0774-38-3804 Fax. 0774-31-8463 E-mail: psmos@kurasc. kyoto-u.ac.jp
日本気象学会1998年度春季 大会	1998年5月27日 ～29日	日本気象学会	気象庁および KKR ホテル東京 (竹橋会館)	